

満州事変から60年目の中国東北で —— 日中関係はどう転換したのか ——

(東海大学) 中野 謙二

はじめに

海部首相の中国訪問と前後して、東北地区の遼寧、吉林、黒龍江の3省を旅行した。かつて満州と呼ばれたこの地域に対する理解を、少しでも深めたいと考えたからである。とりわけ、今年が1931年9月18日に発生した満州事変(中国はその月日をとって9・18事変と呼んでいる)のちょうど60周年に当るので、満州事変とはなんだったのかを現地で問い直してみるのが、ひとつのねらいだった。と同時に、いまようやく本格化した東北地区の近代化のなかで、わが国がどんな役割を果たしているのか、また今後果たすべきなのか、にも関心を持った。視点を二分したのは、両国関係が過去から現在へと、60年へだててどう転換したのかを検証してみたいとの、欲ばった試みからでもある。

I 事変のもつ今日の意味

1 9・18の現地から

瀋陽で買い求めた「瀋陽交通図」に、故宮(清朝初期の皇城)や北陵(清朝2代太宗の墓)などの観光地はあっても、満州事変に直接関連ある記載は見当らなかった。しかしタクシーの運転手に、中国人にわかりやすいように「9・18事変の現場へ行きたいのだが」と声をかけると、迷わずに案内してくれた。瀋陽駅の東北約7.5km、長春方向へのびる鉄道に沿って幅広い望花街が走り、その通りと線路にはさまれた空地が歴史的イベントの発源地だった。

空地の中央に、長さ3m以上はあろうかと思われるコンクリートの柱が、基礎部だけ地中に埋まった形で横倒しになり、そばに「9・18事変炸彈碑」

と刻んだ記念碑があった。説明文を読んで知ったのだが、記念碑はたんに事変の発源地を示すだけのものではなかった。

このコンクリート柱状碑について、市内の書店で買った『瀋陽漫遊』⁽¹⁾に「1938年、戦争熱狂分子が自己の戦績を誇示して建てた柳条湖記念碑である。碑は高さ2.7m、碑志も銘文もない。もともと直立していたが、いまや身を横たえ、泣きふしているかのようである」とあった。

明記されていないものの、「戦争熱狂分子」が当時の日本を指していることは、いうまでもない。38年といえば事変から7年、盧溝橋事件の翌年である。勢いに乗って日中戦争を拡大させた日本軍が、戦争開始の原点ともいえる柳条湖に、コンクリート柱状の炸彈(爆弾型)の碑を建てたのであろう。しかし、それもいまや幻となった。

戦後、炸彈碑が倒れたのか、倒されたのかは知らない。いずれにしろ、中国側はこの碑を捨てはしなかった。むしろコンクリート柱状碑こそ、日本の満州侵略のなによりのあかしだとみて、保存しだしたのである。いまわしい歴史を否定し、忘れ去ろうとするのでなく、あるがままに受けとめようとする、中国らしい姿勢のあらわれであろう。



▲9・18事変の発生した柳条湖

柱状碑のそばで、何人かの作業員が敷石を運んでいた。いずれこの空地も、きれいな小公園となるであろう。が、それ以上に驚いたのは、そこから50mと離れない地つづきの場所に、大きな鉄筋ビルを建設中のことだった。9・18事変の記念館で、60周年までに完成させたいと、突貫工事中なのだそうだ。そばを上り下りの列車が、軽い震動を響かせながら通る。

2 軍部の独走について

満州事変⁽²⁾が、日中関係の不幸な近代の幕開けとなったことは、忘れてならない。のちに訪れた北京の盧溝橋畔にある「中国人民抗日戦争記念館」にしても、「抗日戦争の序幕」の展示を、9・18事変から始めていた。わが国においても、日本はこの事変から宣戦布告なしで中国との事実上の戦争状態に入った⁽³⁾とみるのが一般的であろう。近代日本外交の、いいかえればアジア侵略の、大きな曲り角となったのがこの事変である。なぜそこまで突っ走らねばならなかったのか。

私事にわたるが、私は満州事変発生のおわずか6日前に生れ、6歳で盧溝橋事件を知り、旧制中学2年で敗戦を迎えた。したがって、満州事変に関する知識はすべて、戦後に発表された各種文献から得たものにほかならない。そうした意味では戦中派であり、戦後派でもある。戦前派のような体験もなければ、当時の内外環境を実感してもいない。しかし、それだけ逆に、コメントしやすい立場にあるともいえる。

9・18の現地に立って、そんなことをあれこれ考えながら、やはり非難されねばならないと思ったのは、軍部のあまりにも身勝手な独走であった。

満州事変の構想は、関東軍作戦主任参謀の石原莞爾中佐による⁽⁴⁾とされる。彼は将来のソ連、アメリカとの「世界最終戦」に備えるには、満蒙（満州と内蒙古）を日本の領土としなければならぬと主張、高級参謀の板垣征四郎大佐や永田鉄

山軍事課長らの支持を得た。31年に入って中村震太郎大尉殺害事件⁽⁵⁾や万宝山事件⁽⁶⁾の発生で日中関係が緊張、対中世論が硬化すると、好機到来とばかり河本末守中尉らに満鉄線を爆破させたのだった。しかも――。

(1) 事変直前の9月15日夜、計画決行か中止かの岐路に立たされた石原ら関東軍幕僚は、最後の決をとる会議を開いた。はてしない議論と酒盃の応酬のなかで、夜明けも間近になったころ、板垣大佐がおしかぶせるように言った。「おれが箸を立てるから、これが右にころべば中止、左にころべば決行する。それで決めよう」と。

この記述⁽⁷⁾が正しいとすれば、あまりにも安易に、しかも酒席において戦闘開始が決められたことに、あきれるほかはない。

(2) 満鉄線は爆破されたものの、上下線あわせて1mたらずで、被害はほとんどなかった。その直後に列車が無事通過してしまったほど小規模なものであった⁽⁸⁾。そうした意味では、「満鉄線上で爆薬を爆発させ、その爆発音を合図に中国軍を奇襲攻撃した」との表現⁽⁹⁾のほうが真相であろう。

(3) しかも板垣、石原らの参謀は、これを中国側の攻撃であると本庄繁司令官に偽りの報告をなし、関東軍の全面出動のみならず、朝鮮軍への増援依頼までも承認させている。

(4) この中国側攻撃説は、わが国で当然の真実であるかのように受けとめられた。事変6年後に発行された『新京案内』⁽¹⁰⁾にも、「満州事変の導火線となった奉天（現瀋陽）西郊柳条溝⁽¹¹⁾における支那兵の満鉄爆破事件は――」とある。

石原らは同年5月ころすでに「たとえ政府が動かずとも、関東軍の主動的行動により回天の偉業をなしうる」と唱えていた⁽¹²⁾そうだが、それはあまりにも手段を選ばない謀略であり、武力行使だったといわざるを得ない。それが、歴史の試練に耐え得ず、悲惨な結末に終わったことは、いうま

でもない。

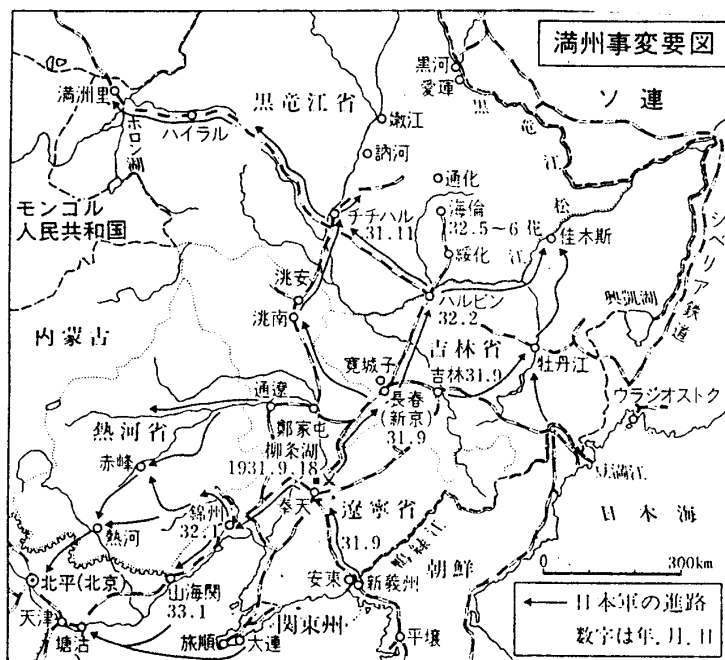
3 拡張志向の体質

政府は関東軍に不穏な動きのあることを事前に察知、抑制のため参謀本部の建川美次少将を渡満させている。しかし、これはむしろ板垣、石原らに計画を練り上げて実行させる結果となったに過ぎなかった。より基本的に考えねばならないのは、板垣や石原ほど露骨でないにしろ、全満州を日本の支配下に取りこみたいとの欲望は、陸軍の指導層がほぼ一致して抱いていた⁽¹³⁾ことであり、その陸軍が圧倒的権力を握っていたことであろう。

わが国はそれに先立って、朝鮮や満州における覇権を争って日清（1894～95年）、日露（1904～05年）戦争を戦っている。ましてそのころ、世界恐慌の波をかぶって不況のどん底にあり、農民の生活は悲惨をきわめていた。さらに、辛亥革命（1911年）によって中国に共和体制の生れたことに対する危機感もあった。そうした背景を考えれば、「満州および内蒙古の地域に独占的な支配権を確立することは、日露戦争以来日本の一貫した国策であった」との指摘⁽¹⁴⁾も、否定しえないであろう。

事変のあと、国際的批判を無視して満州全土の武力支配を進め、32年3月1日、親日派の中国要人に「満州国」の建国宣言を行わせた。王道楽土の建設と五族（満漢蒙鮮日）協和をスローガンとしたが、真の指導力が関東軍にあったことはいうまでもない。政府も同年9月15日「満州国」を承認して関東軍の独断専行を追認。33年2月、国際連盟がリットン報告に基づいて満州における中国の主権を確認、日本軍の撤退勧告を盛りこんだ報告書を採択すると、日本は国際連盟から脱退、国際的孤立のなかでなお軍事的進出に拍車をかけ、日中全面戦争へと突入するのである。

そのころのマスコミが政府の立場を支持、国民を戦争へとかりたてた中であって、東洋経済新報



▲小学館『大系日本の歴史』14から

の石橋湛山（のちの首相）が一貫して満州放棄論を主張したことは、留意されねばならない。彼はその理由を「満州が中国領土の一部であり、中国人を主権者とする外国の地であるからである」と述べ、さらに政府に対して

(1) 元老、軍閥、官僚政治体制から民主的、非軍国的政治体制へと早急に移行させる。

(2) 軍事費、領土拡張費、補助金を改正ないし廃止する。

(3) 保護関税の撤廃と世界市場の開放に努める。などの必要性を力説している。が、当時においては例外的な少数意見であり、現実の政治に影響を及ぼすことはなかった。歴史に仮定法は許されないのだが、もしこうした見解にもっと耳を傾けることができれば——と、残念に思われてならない。

4 いまに残る過去

「満州国」は首都を新京と命名した。現在の長春市である。長春を国都としたのは、①満州の中央である、②政治的色彩が稀薄である、③交通上の要衝である、④飲料水が豊富である、⑤地価が

安い、などの理由による⁽¹⁵⁾という。そこに、日本人の手で新たな王宮、官庁街が建設された。

長春を訪れると、それらの建造物がいやでも目に入る。かつての王宮は吉林省博物館に、関東軍司令部は省人民政府に、新京駅は長春駅となっ
ていまに活用されている。官庁はベチューン医大⁽¹⁶⁾に転用されたものが多く、國務院は基礎医学研究所、司法省は大学本部、軍事省は第一病院、経済省は第三病院にと、それぞれ模様がえしていた。天守閣のような屋根を見かけたので聞くと、かつての日本大使館で、現在は省党委員会とのことだった。

そうした過去は、大連や瀋陽でも見かけることができた。大連に生れ育った人であれば、大広場（現在は中山広場）周辺の大和ホテル（大連賓館）や満鉄本社（鉄道局）、満鉄病院（大連病院）は記憶に強く残っていることだろうし、星ヶ浦（星海公園）へと抜ける市電、沿道の住宅もなつかしに違いない。上野駅に似た大連駅も、昔の姿そのままとのことだった。

瀋陽では南郊の蘇家屯にある鉄道蒸気機関車陳列館を訪れた。アメリカ、ソ連、ドイツ製のSLにまざって、パシナ型もあった。かつてアジア号を牽引、大連―新京（長春）間を平均時速85kmで走った機関車である。すでに第一線を引退したが、「調整すれば、いまも走れますよ」とのことだった。

「満州国」経営に当って、日本は国内におけるより以上の予算を計上した。36年（昭和11年）の一般会計歳出額が24億円だったのに対し、満州産業開発5ヶ年計画（37～41年）に投じられた資本は年平均12億4,000万円、つまり当時の国家予算の半額にのぼった⁽¹⁷⁾という。そのせいもあって、「満州国」の官庁は60年後のいまも使用に耐える立派な建築だし、パシナも「満鉄が世界に誇った特急」の面影を残していた。

5 事変をどう受けとめるか

「過去がいまに残っているのならわかるが、過

去を復元しようとしているのは何故だろうか」

同行の一人からそんな疑問が出た。「9・18事変炸弾碑」のそばに、新たな記念館の建設されているのを見たときのことである。そういえば、歴史再評価の動きは、それ以外にもいくつか目にした。

満州事変に先立つ28年6月4日、関東軍は同じく瀋陽市内で満鉄線の鉄橋（三洞橋と呼ばれている）に爆薬を仕かけ、北京から引き揚げてきた張作霖⁽¹⁸⁾を列車ごと爆殺してしまった。その現場を訪れたところ、ひっきりなしに列車の通る線路ぎわに、高さ2mほどの碑が建てられ、「張作霖被炸處」と刻まれていた。88年9月建てたそうだから、死後60周年を記念してのこととなる。

その張作霖の住居は、いまも瀋陽市内に残っているはずだと、あちこちたずね歩いたあげく、市立図書館の近くで探しあてた。入口に「張学良旧居陳列館」と、父親でなく長男の張学良⁽¹⁹⁾の名があった。館内の張氏帥府（一族の住居）は非公開だが、よく保存されているようだった。最近の開館で、「台湾の同胞がよく訪れます」とのことだった。

また、撫順では山あいの道を50分もタクシーを走らせ、東郊30kmの大伙房ダムのはとりにある元帥林（張作霖の墓）まで出かけた。彼が生前に作り始めたもので、北京の天壇の圓丘に似た立派な円墳。78年以後、省市で手入れして一般に開放しているそうで、「よくこんな不便なところまで」と思うほど、観光客が訪れていた。

こうした事例からいって、中国が過去を復元するのは、なにも9・18事変の発生地だからといって、抗日意識をかきたてようとするのでは決してなかろう。歴史を大切にするその民族性、ならびに近代化によって過去を振り返るだけのゆとりができたことに起因している、というべきであろう。まして今年は事変60周年の節目の年でもある。対日感情については、のちに改めて検討してみたい。

II 近代化のなかで

中華人民共和国の成立（49年）のあと、大躍進とか文革といった曲折はあったものの、79年からの近代化政策のもと、東北三省も着実な進展が続けている。ただ、84年から89年までの成長率をみると、全国平均が9.2%なのに対し、黒龍江6.4%、吉林7.8%、遼寧8.5%と3省とも平均を下回っている。この理由は

(1) 市場経済化の実験がまず南方の広東省で行われ、その成果を全国に反映させる方法がとられた。

(2) 東北三省は近代工業の早くから発達した地区のひとつであるが、それだけに工業に占める重工業と国営企業の比率が大きくて小まわりがきかないうえ、設備が老朽化している。

(3) 軽工業地帯に比べて重工業・国営企業中心地区は市場メカニズムが浸透しにくく、内資と外資との間の合理的リンケージを見いだすのが難しい。

などによる⁽²⁰⁾とされる。

それだけに、というか、東北三省はいま対外開放と市場志向を積極化させており、これに答えるように、香港、日本、韓国の資本・技術が3省に流入しつつある。とりわけ顕著なのが84年10月、14沿海開放都市のひとつに指定された大連市で、同市には191（91年8月現在）の日本企業が進出しているとのことだった⁽²¹⁾。本稿でもまず、大連市の近況から紹介してみたい。

1 日本を注視する大連

東北地区との経済交流の推進につとめる日中東北開発協会（前身は大連経済開発協力会）に「大連の魅力」を聞くと

(1) 良好な港を持っている（従来の大連港のほかに、経済技術開発区に近接して大黒湾港を建設中である）。

(2) 魏富海市長以下の当局者が改革・開放の積極推進者で、日本企業の誘致に熱心である。

(3) 社会基盤が整備されており、エネルギーが豊富、リゾート・レジャーの施設も整っている。

(4) 日本企業の責任者に大連で生れ育った者が相当数おり、愛着を持っている。

(5) 中国側にも日本を理解、日本語のできる人々が他地方より多い。

などの諸点をあげてくれた。そしてこのことは中国側もほぼ同様に認めている。大連市対外経済貿易委の金日辰副主任の発言（要旨）は次のようだった。

——大連は全世界に向けて開放されているが、とりわけ日本を重視している。それは第一に、両者の間に長い歴史があるからだ。もちろん、ふれたくない歴史（日本の大連統治を指す）もあるのだが、数10万の引揚者のなかには大連の発展に協力的な人々がいるので、友好的につきあっている。なかには日本で重要なポストについている人が少なくない（と、大来佐武郎氏らの名をあげる）。

——第二に地理的に近い。東京へ週3便、福岡へ週2便の航空機が飛んでいる。

——第三に、すでにながちりした人間関係が築かれている。魏富海市長の海外出張の半数以上は日本だし、大連を訪れる外国人の半数以上は日本人である。私たちは日本の要望を受け、その実現に努力している。

大連市は沿海開発都市に指定されたあと、市街の東郊約30kmの大孤山半島に経済技術開発区を造成、外資企業の誘致に努めた。この結果、90年末現在で進出企業189件、契約金額91億1,161万ドルとなっており、第一期工区約3km²は完売状態となった。現在第二期工区を隣接して開発中である。順調な進展ぶりといえよう。

2 進出企業の立場

その経済技術開発区まで、タクシーを走らせた。

本的経営に慣れるのは、やはり大変なようだ。社会主義国だからでしょう。納期といってもピンとこない。

公式インタビューのせいかな、大連への不満はあまり聞かれなかった。短所がないわけではなく、ある実態調査⁽²²⁾では、①硬直的な原理原則論が強すぎる、②華南地区に比べてスピードが遅く、実務面での積極性、柔軟性に欠ける、③国際競争への認識不足——などが指摘されている。

3 瀋陽での見聞

ただそれにしても、大連は東北三省では最も改革・開放に積極的であり、進出企業に好感を持って迎えられていることは、断言していい。大連のあと 370km 北上して遼寧省都の瀋陽へ行き、高橋迪総領事の尽力で進出企業の方々に会う機会を持つことができたが、そこでの見聞は長所だけでなく、想像以上に短所を知る結果になった。

——瀋陽は中国第4位、東北地区では最大の都市だし、88年認可の遼東半島経済開放区に含まれている。港にこそ面していないものの、大連までは高速道路が完成している。

「輸出加工区はできているが、企業誘致の準備が足りない。加工区のなかに外為銀行がないし、税関へ行くにも車で出かけねばならない。それに瀋陽は一年の半分が冬だし、公害がひどい。大連とは比較しようがない」

——人口が多ければ、労働力も豊富と思うが。

「農村部の人はよく働らく。都市部の人々は古い制度、習慣に災いされているのだろうか、苦勞することが多い。熱心な従業員を育て、責任あるポストにつけようとすると、周囲がそれに反対、足をひっぱる。当人がかわいそうだ。優秀な人材を見つけ、引っこ抜こうにも妨害されるし、思うようにいかない」

「住宅積立金制度を設けて従業員の将来に備えているのだが、本当に困った人でなく、年配のボ

スが出てきて住宅をよこせという。住宅は企業が提供して当然との、中国的発想からなんだろう」

——日本の企業だから、そんな問題が起るのだろうか。

「対日感情は決して悪くない。日本的な企業意識、労働意欲がないのだ。研修のため日本へ派遣しようとしても、そう乗り気でない。日本へ行ったら、いくらお金くれるの——といったぐあいだ」

本章の冒頭で述べたように、東北三省は重工業と国営企業の比重が大きい、とりわけ瀋陽市が著しく、89年段階で工業と農業の比率は95対5（遼寧省は87対13）、重工業と軽工業の比率が65対35となっている。重工業は国営企業とみていい。となれば、北京からの指令で動き、行政部門ごとに管理されているだけに、従業員は長らく親方日の丸ならぬ「親方五星紅旗の鉄飯碗」⁽²³⁾に慣らされてきたことだろう。そこに新興大連との基本的な違いを見た思いがした。

また、そうした事情とは別に、外資企業は沿海への進出を希望、内陸を敬遠する。東北三省の外資利用状況⁽²⁴⁾をみても、件数で遼寧 533（75%）、吉林81（12%）、黒龍江88（13%）、投資額では遼寧 3,760万ドル（77%）、吉林 360万ドル（7%）、黒龍江 770万ドル（16%）と、遼寧省が圧倒的である。この傾向は当面つづき、したがって今後は大連のほか营口（人口53万人）、丹東（61万人）、錦州（81万人）、盤錦（39万人）などの沿海都市（いずれも遼寧省）が脚光を浴びるだろう⁽²⁵⁾という。

4 過去とのかかわり

さて、中国の近代化と日本のかかわりを調査するなかで、同時に知りたいと思ったのは、過去の両国関係が現在にどう投影されているかであった。この点、大連への進出が過去の歴史的つながりを前提としていることを日中双方が認めており、好ましく感じられた。かつての侵略と被侵略、加害

者と被害者の対立・矛盾が論じられるのではなく、協調への歩み寄りが大勢を占めているのである。

もちろん、満州事変以後、日本軍に殺傷されるとか、開拓民に農地を奪われるなどした東北地区の人々、ならびにその親族、子孫が多いことだろう。しかし、そうした体験からくる批判、非難は、旅行中なんら意識することなしに過ぎたし、同地区に長期滞在する企業の方々からも、耳にすることはできなかった。

悪いのは日本帝国主義であり、日本国民はむしろ被害者だったとの中国側教育が、それだけ徹底しているからだろうか。東北に生れ育った人々が、第二の故郷を旅して「かつて住んだ家もそのまま、何家族も暮らしていました。わたしを温かく迎えて、もてなしていただいて感激しました」といった話をよく耳にする。

あるいは、時の流れ、政情の変化が彼らにゆとりを持たせたのだろうか。文革中、日本帝国主義の手先だと逮捕されたり、いじめられたりした残留婦人、残留孤児がけっこういた。20数年前のことである。日中国交正常化後も、「満州国」関連の史跡めぐりをやって中国側から抗議されることがしばしばだった。そして現在、「満州国」のかつての王宮や官庁街を、なんのこだわりもなく參觀することができる。

もっとも、経済交流の場で、よく「昔、日本は中国から文化を学んだ。今度は日本が中国に技術を持ち込むときである」との会話が交わされる。双方の意見はもちろん一致するのだが、中国側にはもうひとつすっきりしないものがある。あまり口には出さないが「45年前までの侵略の歴史があり、もっと心底協力してもらってしかるべきだ、という気持が伺える」という⁽²⁴⁾。

経済協力、商取引と政治、歴史は別だ——とってしまえばそれまでだが、それ以前の問題として、相互理解があってこそ正常な交流の行われることを、認識しなくてはならないであろう。

III 過去をふまえての将来展望

1 60年へだてて

満州事変から60周年、日本はいままた東北地区とのかかわりを強めている。60年は、人間でいえば還暦である。歴史がふたたびもとの干支にかえるように、日中関係に過去と似た展開が見られておかしくない。問題なのは、両者の質的内容の違いである。過去をふまえての現状であり、将来展望であるかどうかであろう。

これまでに見てきたように、60年前は軍部独走の満州支配であり、それを支えたのが拡張志向の日本の体質であった。軍事力が国家に所属することを考えれば、国をあげての中国侵略にほかならなかった。これに対して、今回は経済を前面にたてての協調であり、企業や民間人が主役となっている。

軍事力と経済力の相違について、私は軍事力の本質が物理的強制力つまりムチであり、価値破壊的性質を持つのに対し、経済力は本来、価値創造的な社会の活動によって生み出される、と理解している⁽²⁵⁾。しかも、経済建設を進めるには、資源、資金、技術の導入や外資獲得の必要性から、周辺諸国との交流を広げ、平和で安定した国際環境を醸成することになる。

この点、わが国が満州事変から日中戦争、第二次大戦へと続いた軍事力の行使を反省、平和憲法のもと、経済建設優先の政策で国家的発展と繁栄をもたらしただけでなく、アジアNIES（新興工業経済地域）やASEAN（東南アジア諸国連合）をも巻き込んでアジア太平洋地域における協調ムードを高めつつあることは、評価されていい。

一方の中国は、78年12月の11期3中全会以後、改革と開放を柱とする近代化政策を本格化させ、わが国を含む先進資本主義諸国との交流を密にした。とりわけ華南において香港・台湾資本の導入をはかったのと対比的に、東北地区においてはわ

が国、韓国との協調を前提に開発を進めだした。

軍事力でなく、経済を前面にたてての相互交流である以上、基本的には両国関係は質的に転換したと判断していいであろう。胡耀邦総書記のころ、一部の中国人学生が日本の経済的進出を経済侵略だと非難したことがあった。その心情は理解できるし、そうした危険性の内包していることを自戒する必要はあるが、だからといって、経済交流を非とするのは当たらない。交流を求めるのが圧倒的多数の意見だし、また交流をやめようとして、やめうる時代でもない。

2 なぜ東北地区なのか

それにしても、60年前も現在も、わが国が東北



▲デパートの化粧品売場 ハルビン市内で

地区（旧満州）へと向うのは、どのようなきずながあってのことだろうか。結論から先にいえば、それだけ強い利害と関心を、この地域に持ちつつけているからにはほかならない、と私は考える。

東北地区は、中国においてこそ東北端に位置するが、このところ脚光を浴びつつある北東アジア⁽²⁸⁾においては、むしろ中央部を占める。長春の吉林省博物館で陳列品を見ていて感じたことだが、この地は必ずしも古くからの漢民族の支配地域でなく、過去には高句麗、渤海、遼、金、清などアルタイ語系遊牧諸民族が栄えてきた。

わが国と北東アジアの歴史的つながりについては、私の『北東アジアの新風』⁽²⁹⁾を参照されたいが、言語や風習など文化的共通点が少なくない。

まして大和朝廷を樹立したのが北東アジアから南下した遊牧民族だったとする「騎馬民族説」が正しいとすれば、多くの日本人は北東アジアをそのルーツとすることになる。もちろん、これは今後の学術的研究に待たねばならない問題ではあるが、強い関心を持つべきテーマであろう。

それは別としても、北東アジアは日本海の対岸に横たわる広大な土地であり、豊富な資源を有している。資源の乏しい島国・日本がこれに着目、弱肉強食の国際的風潮に乗じて満蒙領有論を展開、失敗した。それが巖然たる歴史的事実である。反省しなければならない。

ところが60年たって、こちらから押しかけるのでなく、向うから協力呼びかけがなされた。軍事力の行使でなく、経済的協調である。応じない手はなかろう。いま始まったこの流れは、これまでに述べた両国の歴史からいって、将来はもっと大きな潮流となることだろう。月並なことばだが、相互理解を前提とし、長期的大局的視野に立っての協調が進められるよう希望したい。

3 近代史の再認識を

8月訪中した海部首相は、北京市内における11日の演説で「日中両国間の長い友好の歴史の中で、日本が深く反省すべき不幸な一時期があったが、この克服には双方の忍耐強い努力と、情熱が必要だった」との表現で、過去の戦争に対する厳しい反省を表明した、と報じられた⁽³⁰⁾。反省の表明はいいのだが、後半部分にあるように、はたして克服ずみの問題と解釈していいのだろうか。

現状からいえば、やはり5月3日のシンガポール演説のように、「今世紀前半の歴史を振り返り、多くのアジア太平洋地域の人々に、耐えがたい苦しみと悲しみをもたらした我国の行為を厳しく反省する」「今日、日本国民すべてが過去の我国の行動についての深い反省に立って、正しい歴史認識を持つことが不可欠と信じる」⁽³¹⁾と述べるべ

きでなかったか。

確かに、日中関係は72年の国交正常化によって「不幸な一時期」を清算した。しかし、その反省に立って、正しい歴史認識をすでに持ち得たといえるのだろうか。そうは思わない。学校教育において、日本の近代史がとかくおろそかにされ、アジア諸国とのかかわりを知らない若者がふえていることは、しばしば論じられる。そのせいか、日中関係に限っていえば、日中戦争、つまり日本の中国侵略そのものはタナに上げ、その流れの中で生じたできごと——例えば盧溝橋での最初の発砲が中国側ではなかったかとか、南京大虐殺に関する中国側被害者数の発表は多すぎてデタラメだ、などといった主張がまかり通る。もっと謙虚に、侵略そのものを自省すべきでなかろうか。

私がいまなお過去にこだわるのは、ひとつには「人間になにができるかを知る唯一の手がかりは、人間がこれまで何を行ってきたかということにある」と考えるからであり、もうひとつは、日本人が、少なくとも中国人に比べて、あまりにも安易に過去を水に流すからである。このままでは、日中双方の歴史認識に大きなへだたりを生じ、真の相互理解を難しくし、せっかく始まった協調にヒビを生じさせかねない。

わが国において戦争への反省といえば、ヒロシマ・ナガサキがまず連想されることであろう。満州事変・盧溝橋事件とか真珠湾攻撃といった加害者側の行為は、それほど強く意識されない。と同様に、満州といえは赤い太陽、あるいはアカシアの大連などと、心情的に捉えられることが多いのではなかろうか。

過去の戦争において被害者だった中国は、そうでない。簡単に忘れないどころか、いまになって9・18事変の記念館を建てている。あるいは、街の至るところに「過去」が残されている。おもな抗日戦関連の記念館、陳列館だけでも黒龍江省の731細菌部隊犯罪証拠陳列館（ハルビン南郊20キロ）、

東北烈士記念館（ハルビン市内）、日本侵略軍犯罪証拠展覧館（呉孫県）、吉林省の楊靖宇將軍記念館（長白山山ろく）、遼寧省の平頂山惨案遺跡博物館（撫順）などがある。

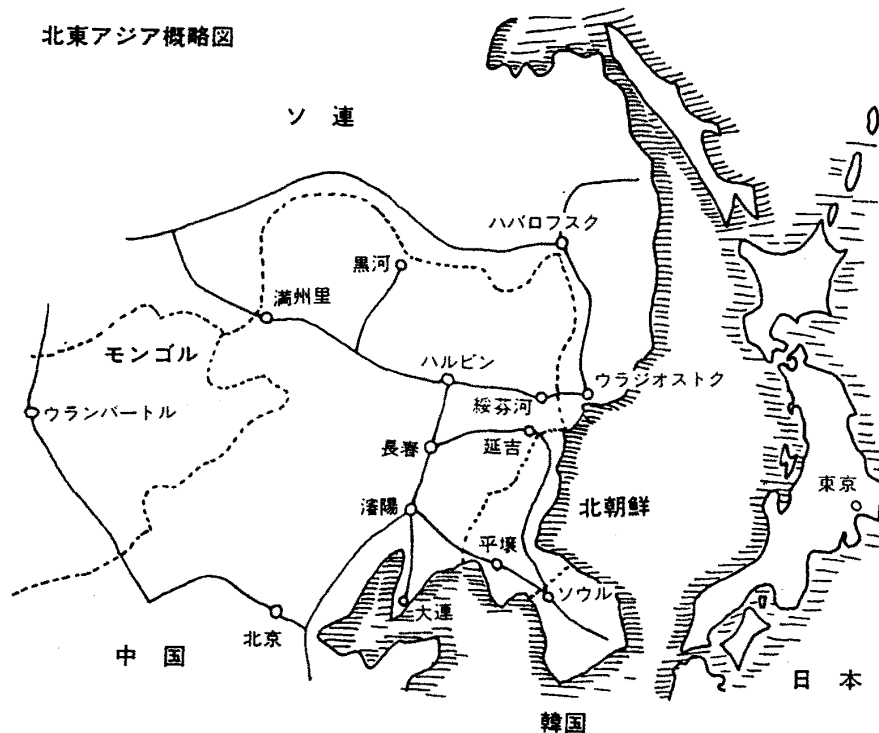
満州ということばひとつとっても、日中では意味あいが違う。わが国においては中国東北地区、もしくは東北三省というより、旧満州のほうが理解されやすい。しかし、中国ではそうでない。満州族、満州語としては使用するものの、地域名としてはあくまで東省（清朝）東三省（中華民国）、東北地区（新中国）と呼び、満州は用いない。歴史的事象の説明で使用を迫られたときは、「偽満州国皇居」「偽皇宮陳列館」「偽満州中央銀行」などと偽（合法ではないとの意味あい）をつけて用いている。

学術的にいえば、満州は17世紀前半、東北地区に居住した女真人が、自国および民族名をマンジュ・グルンと呼んだのに始まる。女真人が文殊菩薩を知恵の仏・平和の仏と崇拝していたところから出た、とされる⁸²⁾。当初は現在の遼寧省西部および吉林省の山地を指したが、清の勢力が広がるにつれて東北地区全体を意味し、一時は沿海州をも含めた時期もあった。欧州では19世紀中ごろからこの地域をマンチュリアと呼び、日本もこれにならって南満州鉄道（満鉄）を経営、「満州国」をつくった。

民族・国家による立場の違い、歴史観の違いは意外に深刻なものがある。新たな交流を進めるに当って、近代史の再認識を求め、相互理解の必要性を訴える理由は、そこにもある。

4 長期的大局的視野から

さきに、東北地区とのかかわりが軍事から経済へと転換したことを、基本的に肯定した。このことは、経済的進出であればなんでもいい、というのではない。第三世界との経済協力にともなう生態系の破壊や、先進国との間の経済摩擦がその反



▲『中国研究月報』90年9月号から

面教師であろう。昨今のバブル経済のように、利潤追求第一で相手の立場を尊重しないのであれば、東北においても同様の誤りを犯すことになるだろう。

経済は経済の論理に従って動くであろう。しかし、例えば大連は安価ですぐれた労働力が豊富だから——というだけではすぐ壁に突き当たる。もっと広い視野に立って、東北地区全体が、あるいは北東アジア全域が経済発展を遂げることによってこそ、この地域の安定的発展がはかれるとの認識も必要ではなかろうか。そのためには中国自身の努力も必要で、周辺諸国との協調を密にし、広域的視野に立たねばならない。またわが国において、東北との交流を経済界のみにまかせるのではなく、もっと幅広いものにしなければならない。

旅行中、何組かの日本人グループに会ったが、多くは東北に生れ育った人々の「感傷旅行」だった。若い人々が少ない。学術・文化・スポーツを含めたもっと幅広い交流の必要性を感じたものである。

なお、今回の旅行にさいしては東海大学社会科

学研究所の協力と支援を得たので、紙面を借りて謝意を表させていただきたい。

〔注〕

- (1) 中国旅游出版社1984年刊・66ページ。
- (2) 31年9月18日の柳条湖事件から翌年3月の「満州国」建国までを満州事変と呼ぶ場合もあるが、ここでは柳条湖事件に限定して使用した。
- (3) 江口圭一「二つの大戦」『大系日本の歴史』14, 小学館 194ページ。
- (4) 講談社『昭和2万日の全記録』第2巻「大陸にあがる戦火」294ページなど。
- (5) 31年6月27日、兵要地誌調査のため、日本人旅行禁止区域の興安嶺方面に入っていた中村大尉が、中国軍に射殺された。
- (6) 長春近郊に入植した朝鮮人農民と中国人農民の衝突事件。31年7月発生、のち朝鮮での報復暴動に発展、中国人1,000人以上が殺害された。

- (7) 半藤一利『昭和史の転回点』図書出版社46ページ。
- (8) 古屋哲夫『日中戦争』岩波新書60ページ。
- (9) 前掲(3)『大系日本の歴史』14, 192ページ。
- (10) 氷見文太郎編, 新京案内社発行21ページ。
新京は現在の吉林省都長春市。同書は86年アートランド社から復刻版が刊行された。
- (11) 当時、関東軍は事変発生日点を柳条湖でなく、なぜか柳条溝と発表した。このため、敗戦後の東京裁判でも柳条溝が用いられた。柳条湖の近くに柳条溝の地名はあるが、事件とは関係ない。中国側は柳条湖を用いている。
- (12) 小島晋治ほか『中国近現代史』岩波新書138ページ。
- (13) 前掲(3)『大系日本の歴史』14, 190ページ。
- (14) 前掲(12)『中国近現代史』137ページ。
- (15) 駒井徳三『大満州建設録』による。前掲(10)の『新京案内』から引用。
- (16) ベチューンは37年から解放区で医療に従事、殉職したカナダ人医師。
- (17) 高橋正「走馬看花」『自由世界』80年1・2月号。
- (18) 中華民国の軍人・政治家。1919年東三省を領有し、27年北京で大元帥となった。同年国民政府の北伐軍と戦って大敗、28年奉天（瀋陽）に入ろうとして関東軍のため爆死させられた。中国はこれを皇姑屯事件と呼んでいる。
- (19) 中国東北の軍閥。28年張作霖爆死のあと、日本の威圧を退けて全東北を南京の国民政府のもとに統一した。36年、蔣介石に一致抗日を求め、断られると監禁（西安事件）、のち国共合作への道を開いた。しかし、彼自身はのち禁固刑に処せられ、蔣介石の死後まで台湾に監禁された。
- (20) 栗林純夫「東北三省の経済発展」『遼東半島・大連の経済発展』日中東北開発協会28ページ以下。
- (21) 『日本経済新聞』91年6月20日によれば、外資系企業の投資は同年4月末で599件、総額9億1,000万ドル。日本は投資件数で180件と香港・マカオに次いで第2位だが、金額では3億5,000万ドルでトップである。
- (22) 「大連への投資に関する実態調査結果報告」から。前掲(20)の『遼東半島・大連の経済発展』171ページ。
- (23) 食いつばぐれのない職業。国の指令に基づいて生産するだけに、競争原理が働かず、出勤さえすれば身分・給与は保障されるが、企業にとっては人員過剰と規律の弛緩をもたらす。
- (24) 『中国統計年鑑』および『中国対外経済貿易年鑑』90年版による。
- (25) 白須孝「地域開発の中核となる大連の発展方向」前掲(20)の『遼東半島・大連の経済発展』92ページ。
- (26) 住田安彦ほか「対中投資の現状と問題点」同上160ページ。
- (27) 中野謙二「北東アジア地域の協調と中国の対応」『中国研究月報』90年9月号2ページ。
- (28) ソ連の極東シベリア、中国の東北地区、南北朝鮮、モンゴルおよびわが国を中心とする地域。
- (29) 情報企画出版91年刊、31ページ以下。
- (30) 『読売新聞』91年8月12日、笹島特派員電を引用。
- (31) 栗屋憲太郎「いま、未決の戦争責任とは」『世界』91年9月号から引用。
- (32) 勇士、英雄を意味する瞞咄（まんとう）とのことばに由来する、との説もある。『朝日新聞』91年6月10日「天声人語」欄から。